

舞踊と音楽の歴史的関連性 (その 1)

—起源と原始時代—

菊 本 哲 也

舞踊史と音楽史は、すでに多くの研究業績が残されている。しかし、それらの著書論文は、それぞれの分野でのみ研究されたものが多く、いささか不満と疑問を感じる。

舞踊と音楽とは、本質的な相違点があるとはいえ、人類の長い歴史において他のいかなる芸術よりも近い位置にあり、影響しあって発達してきたのは、何らかの連帶的構造要因によるものであろう。また、舞踊においては音楽を要因の一つに数えており、音楽においては舞踊音楽を無視して絶対音楽¹⁾を考えられないであろうし、原理的にはいずれもリズムを第一の構造要因としていることなどから、両文化の相互的研究が必要であり、意義あることであると考えられる。

そこで、この二つの文化の様式や構造における、歴史的関連性の究明を試みると同時に、それぞれの本質をも考察してみることにした。今回は、その第一報として、「起源と原始時代」についての考察を行った。

原始時代²⁾の文化を研究するには、神話や伝説、考古学的資料(遺跡、遺物)、それに民族学、人類学などのたすけをかりて、未開人の生活様式や人間の成長過程をとおして推測する以外に方法はない。

I. 舞踊と音楽の起源

舞踊はすべての芸術の原始的要素であるといわれる。それは舞踊が何の客体をも通さず、身体が表現の主体であることによるのであろう。人間の身体的条件³⁾から律動的な運動が考えられ、そこに舞踊の起源が存在するというのである。しかし、律動的運動は本能的なものであり、それだけでは舞踊とはいえない。必臓の鼓動や歩行は他の動物にもみられる現象である。この身体的条件と機能が何らかの表現を目的としたとき、はじめて舞踊といえるのではなからうか。また、人間の身体的条件と機能には発声も含まれており、その律動的要素からは音楽の発展が考えられる。

このように舞踊と音楽とは、身体的条件と機能からその起源を同じくしていると考えられる。

1. 神話と伝説

舞踊や音楽の起源は、世界各地の神話や伝説に残されており、自然神的なある神格に結びつけたり、英雄的な個人の名前とともに語り伝えられている。いずれもその民族の舞踊

- 1) absolute music. 標題音楽の対立概念。詩や絵などの他の芸術や、音楽外の表象や観念と直接結びつかないで、音の構成面に集中しようとする音楽。
- 2) B. C 500 年くらいまでの旧石器時代、新石器時代。
- 3) 人体の完全な左右のシンメトリーと、心臓の鼓動、呼吸など。

の様式や、楽器をしのばせるものがあり、非科学的と無視するわけにはいかない。

ギリシャ神話のムーサイ (μοῦσαι)⁴⁾ や、日本神話のアメノウズメノミコト (天鈿女命)⁵⁾ のいい伝えは代表的なものであるが、その他にいくつか紹介してみよう。

1) 自然的起源の伝説

《ジャワ島の伝説》

あるとき梢にかかった竹のくだに、そよ風がふいて美しい響きを四方に伝えた。それが彼らに伝わる音楽のはじまりである。

2) 神格としての名前

《インドの神話》

言葉の神 Brahmā が同時に音楽の神を兼ねていて、その下に楽神や楽鳥の全家族が栄えるといわれる。

《北アメリカの伝説》

Tezcatlipoca という神は人々に太陽から音楽をとってこさせようと、鯨と亀を組んで長い浮橋をかけ、これを渡った祖先の人々が太陽神から音楽をもらってきた。

3) 英雄的人物の名前

《アビシニアの伝説》

音楽の始祖 Yared は、ある日精霊にみたされ、鳩の形をした精霊から、読み、書き、さらに音楽を教わった。

《アフリカの Asaba 族の伝説》

Ibuzo 部落生れの弾師 Orgardié が、あるとき森深くさまよっていると森の精霊たちの歌い踊るのを見た。彼はそのリズムをおぼえて急ぎ部落にかえり人々に教えた。

これらの神話や伝説から推測されるように、原始的な文化の姿は個々のものではなく、舞踊も音楽も、また文学的なものもすべてを包含した形態であったことがうかがえる。

そして、東南アジアの竹製楽器や、北アメリカの鯨と亀から音程の異ったドラムの連想など、楽器学のうえからもうなずけるものがある。

文明の進歩とともに、このような物語に少しずつ科学的な省察をまじえた合理的な説明が記述されるようになり、ギリシャ時代の Demokritos や Platon の弁証法的起源論を経て、次に紹介するような科学的な伝説が唱えられるようになる。しかし、いずれの学説も単に機械的な原因、あるいは期成的な原因による解明にとどまっている。これらはそのまま原始時代の舞踊や音楽の様式にあてはまるものであり、逆にいえば原始時代の様式をそのまま起源と考えるものである。より本格的な究明はなお将来にまっほかはない。

4) 最高神ゼウスと記憶の女神ムネーモシュネの間に生れた9人の女神の一般名(複数)。クレイオー(英雄詩または歴史)、ウーラニアー(天文詩または天文学)、メルポメネー(悲劇)、タリアー(喜劇)、テルプシコレー(合唱詩)、エラトール(抒情詩)、カリオペー(叙事詩)、エウテルペー(吹奏楽)、ポリュムニア(讃歌または舞踊、のちには身振芝居)の9人。

5) 日本書紀・神代・上・第七段「又猿女君(さるめのきみ)の遠祖天鈿女命(媛のうずめのみこと)、則ち手に茅纒(ちまき)の梢(ほこ)を持ち、天石窟戸(あまいはやと)の前に立たして、巧に作俳優(わざま)す。亦天香山(あまのかぐやま)の真坂樹を以て鬘(かざら)にし、蘿(ひがげ)を以て手纏(たぎ)にして、火處焼(ほころや)き、覆槽置(うけふ)せ、頭神明之憑談(かむかり)す。」

2. 舞踊の起源

ここでは邦 正美の「舞踊の文化史」による本能説と模倣説の紹介にとどめることにする。

1) 本能説

先に述べた律動的運動による快感がさらに高まり、感情の表出を伴うとき舞踊的現象となる。この現象が本能的衝動によるのみならず、人間の生活に結びついた何らかの目的を持つにいたり、はじめて舞踊となるのである。

2) 模倣説

舞踊が人間の生活に結びついた何らかの目的を持つようになると、本能的な動きだけではなく、もっと別な動き方をとり入れることが必要となり、何かの動きをまねることが始まる。必然的に自然現象や動植物の模倣による舞踊が考えられるというのである。

3. 音楽の起源

音楽の起源については、4 または5つ⁶⁾の仮説が唱えられている。ここでは4つにまとめて紹介する。

1) 言語起源説

J. J. Rousseau や H. Spencer, J. G. von Herder の説である(普通スペンサー説といわれる)。多少なりとも意味の通じる言葉らしきものが激しい感動を表わそうとするとき、そこに音楽的な抑揚やリズムを生み、やがて言葉との結びつきを去って器楽に移され、それはついに絶対音楽の域にまで高められることになる。すなわち「感情の表出」を音楽の起源として説いており、同時に音楽の本質であると考えたのである。

2) リズム起源説

R. Wallaschek は原始人の戦闘歌や狩猟歌から、また K. Bücher は労働に伴う歌唱の形式から、動きに伴った音楽の起源を唱えている。ヴェラシェックの説は、まさに舞踊の起源と直結したものであり、いずれも伴奏音楽としての起源を推測したものである。

3) 性的衝動の発現による起源説

有名な「種の起源」の著者である C. R. Dawin は、進化論の立場から次のように説いている。鳥にととると、より美しい歌声に恵まれた雄鳥は、それ故に他の同性に先んじて異性をかちえるにちがいない。こうして機代にもわたって淘汰をくりかえし(自然淘汰説)、ついに鳥の歌声は今日のように快よいものとなった。この現象は人間にも及んでおり、音楽が愛情を高め、快よさを感じさせるのは、音楽によせる人々の喜びが、このように深い起源、原始的衝動に根ざしているからである。

4) 信号起源説

K. Stumpf は音楽における語法的なものを、リズムでなく旋律の方面から説いている。音楽が単なる言葉と相違するのは、第一にある一定の音度⁷⁾が持続的に保たれる点にある。そして、性別や年齢の相違から更に相対的な音感覚が導入され、最後に、他のすべての動物と異って、高い芸術的な展開の可能性を示したのは、移調⁸⁾された旋律の中にもまた、

6) 紹介した起源説の第3 ダーウイン説より「動物の鳴き声の模倣」を分離して考え、これを第5の起源説とする場合。

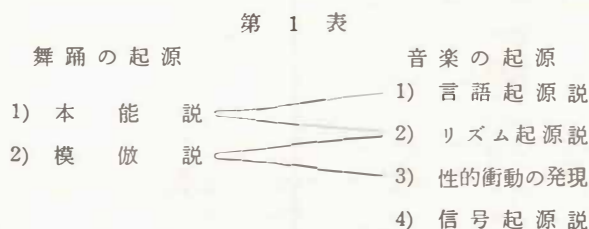
7) 音の高さを示す。

8) 楽曲全体を上または下の音程に移して、音域を変えること。

原旋律と等しい音楽的な意味を再認することができるからである。

4. 起源説における関連性

舞踊と音楽の起源説は、その本質的な相違のゆえにやや観点の異った説となっているようである。そこで、これらの起源説の関連性を次のような第1表にまとめてみた。



第1表の実線で示したように、舞踊と音楽の起源は密接な関係を持っている。音楽 2) の説は、舞踊とまったく同じ要素より発達した音楽を考えているのに対し、音楽 4) の説は舞踊とは無関係な音楽独自の起源説を唱えている。絶対音楽の立場では、この 4) を支持することになる。一方標題音楽⁹⁾の立場としては 1) と 3) を支持し、また、舞踊音楽は 2) にあてはまることは言うまでもない。一般に音楽の起源としては 1) と 4) を中心に考えたい。舞踊の起源は本能説を中心に考えるべきである。なぜなら、舞踊においても、音楽においても、模倣はメテエにすぎないからである。したがって、音楽におけるダーウィン説は「異性の吸引」の意味において、音楽の起源となり得るが、「動物のなき声の模倣」の意味においては弱いものとなる。

II. 原始時代の舞踊と音楽

原始時代の文化は、全てが日々の生活の実利的必要性によるものであり、娯楽性や審美性は第二義的なものでしかなかった。したがって、今日われわれが概念とするような芸術は存在せず、生活に直結した目的の舞踊や音楽でしかなかった。このような原始時代の文化を究明するには、まず宗教を考えなければならない。朝の目覚めから、夕べの眠りにいたる生活事象のすべてが、原始人にとって、まことに神秘的であり、恐怖でさえあったろう。

天の運行、地の変異、動植物、人間の生死などの神秘や恐怖は、それらの精霊と靈魂の崇拜の観念を生み、さらに神聖とタブー、呪物崇拜、トーテム崇拜の観念を生んだ。そして、しだいに祭儀の形をとるようになり、ここに原始宗教の形態が生まれるのである。

このような原始人の宗教は、禍を避け、自己または氏族の利益を求める観念を基本としており、生活の実利的目的を持つものでしかなかった。

祭儀には、氏族の全てが参加した。このことは氏族社会の成立に深い意味を持ち、団結を強めて原始共産社会を生み出してゆく要因となる。

また、神と人間との対話を行う巫女的人物があらわれて、しだいに祭司を中心とした祭儀の形式がととのってくる。

9) programme music. 絶対音楽の対立概念。曲の内容を暗示する題や、筋書ふうの説明する文(標題)がつけられて、文学的・絵画的・劇的などの内容を強く暗示しようとする音楽。

こうして、巫女的人物の神がかり的な行動は舞踊的なものとなり、その行動を高潮し秩序づけるために単純な音楽が反復して用いられ、また、部落民の集団舞踊や合唱の形態を生み出してゆくことになる。

原始人の生活は、このような宗教的行事に一日の多くをついやしていたようであるが、その目的はあくまで実利的であった。

狩猟生活の時代から農耕生活の時代（新石器時代）へ移ると、労働に伴った舞踊や音楽が生まれてくる。特に、リズムのもつ効力が認められて、あたかも魔術のように労働作業の疲れを軽くすることに役立つ音楽は、舞踊とは別に労働歌の発達をみることになる。

1. 原始時代の舞踊

原始時代の舞踊は、その目的を生活に直結した実利性においていることはすでに述べたとおりである。すなわち生活のための舞踊といえることができる。舞踊は娯楽でもなく、物まねでもなく、ましてや芸術ではなかったのである。

1) 狩猟舞踊（模倣的）

原始人は狩猟による食生活を営んでいた。

狩猟に際して、狩猟人の勇気を鼓舞し、全員の結束を強め、神に豊猟を訴って踊り、狩の場所で重ねて豊猟を訴る舞踊が行なわれた。

また、狩を終えて部落にかえると、神への報告と感謝の舞踊を行った。

狩猟舞踊は団結の目的において、全員がそろって同一の踊りを規則正しく踊った。この様式は、次の戦闘舞踊にも共通である。

また、動物仮装人の踊りが含まれており、いわゆる模倣舞踊の形態を持っている。

2) 戦闘舞踊（体操的）

氏族間において、さまざまな原因による戦闘が行われたが、その際、勇気を鼓舞し、団結と勝利を訴って舞踊が行なわれた。戦闘を終って部落にかえると、神の加護を感謝し、また戦場における勇姿を人々に見せるために踊った。戦場で敵方を前にして、神に勝利を祈る舞踊があり、この習慣のため、近代の戦闘では、未開民族が近代兵器の前に、みじめな敗北を喫した例が少なくない。

3) 武器舞踊（芸術的）

狩猟や戦闘における武器崇拜の観念から生まれた舞踊であり、しだいに実利的目的をはなれて、審美的な舞踊へとかわってゆく。

4) 精霊と靈魂の舞踊（宗教的、模倣的）

原始人は死者、動植物、自然物の靈魂を、最も神聖なものとして崇拜し、その祭儀において、それらの仮装人の踊りや、崇拜者の踊りを行った。

5) トーテム崇拜の舞踊（宗教的、模倣的）

トーテム（祖先獣）信仰は、トーテム舞踊を生んだ。これもトーテム仮装人と崇拜者の踊りとがある。

6) 祈禱舞踊（宗教的）

狩猟時代から農耕時代へ移ると、豊作、雨乞い、太陽のよく照ることを祈って舞踊を行った。人間の力でどうすることもできないことを神の力にすがったのである。

7) 医療舞踊（宗教的、模倣的）

病気は悪魔のしわざであると考え、悪霊を退散させるために舞踊を行なった。いわゆる

魔よけの舞踊である。

8) 呪詛舞踊 (宗教的)

原始人は自分の崇拜する呪物を祭り、願いごとを聞きいれてもらうために祈って舞踊を行なった。しかし、多くは自分を利するためではなく、他人に禍がかかるよう、呪いをこめたものである。

9) 性の舞踊 (宗教的, 模倣的)

出生の神秘は性器の信仰を生み、成年式や結婚の祭儀を行うようになり、それにとまって舞踊を行った。男性生殖器を神聖化し、女性生殖器を生理現象の不浄性や出産の神秘性からタブーとしている。いずれにせよ、性の舞踊は原始人にとって恋愛の表現法でもあった。

2. 原始時代の音楽

音楽も舞踊と同じく生活のためのものであったことはいうまでもない。それは、多くの場合舞踊と直結しており、呪文や祈りや舞踊そのものを高潮させ、秩序づけるためのものであった。これらの音楽は宗教的であり、模倣的であり、その響きは不気味な、不快なものであったことが楽器学において推測できる。このような不気味な音響を用いたのは、狩猟や戦闘の場で、相手を恐れさせることを目的としたからである。また性的な音楽も、今日のような概念とは異り、いわゆる略奪結婚の形態であったから、当然不気味な、恐ろしい、強烈な音楽であったものと思われる。農耕の時代に移り、しだいに快よい音色の楽器が生まれ、わずかながら音階的なものがみられるようになるまでは、恐ろしい、不気味な響きがうずまいていたのである。

祭儀における音楽は、歌詞らしきものと結びついて、単調な短い一つの旋律を無限に反復し、独唱 (祭司) と合唱 (部落民) とが不気味な音響をかもし出していた。独唱は、きわめて自由奔放であり、気まぐれで、リズムさえ定かではなかった (即興的) のに反し、合唱は、リズムの一致を前提としていた。

また、女声と男性の合唱や、パンの笛¹⁰⁾のような楽器と声楽との合奏など、あやしげな無意識のポリフォニー¹¹⁾ (ヘテロフォニー¹²⁾) や種々のリズムの組み合わせが行なわれた。

狩猟や戦闘においては、一定の高さの音や、響きの良好で容易な音程 (4度, 5度) が信号や合図として用いられた。

[原始時代の楽器]

楽器は、音楽史においてはもちろんのこと、文化圏学、人類学、民族学などにおいても、より純粋な歴史的要素として、大きな意義をもっている。楽器の歴史や、その分類法の展開については、C. Sachs の書¹³⁾を参照されたい。ここでは、彼の4種の分類法による、

- 10) panpipe. もっとも原始的な管楽器で、数本の大小異った管を横に並べて結んだもの。半獣神パンが用いたということから「パンの笛」と呼ばれる。
- 11) polyphony. 語源的には多声を意味し、多声音楽と訳される。作曲技術的には対位法といい、対位法的技術を用いて作られた音楽を意味する。
- 12) heterophony. 原始的な段階の多声性の一つで、同一の旋律を多数で同時に演奏するとき、ある声部が即興的に変奏や装飾をするために一時的に原旋律から離れた形態である。
- 13) 「楽器の歴史・上・下」「比較音楽学」「Reallexikon der Musikinstrumente・楽器百科全書」「Geist und Werden der Musikinstrumente・楽器の精神と生成」等。

原始時代の楽器の紹介にとどめておく。

C. Sachs の分類法¹⁴⁾

- (1) 体鳴楽器
- (2) 気鳴楽器
- (3) 膜鳴楽器
- (4) 弦鳴楽器

旧石器時代には「騒音」¹⁵⁾ を出す音響発生具のみ存在する。それらは、衝動的リズムの必要からか、あるいは、音響的手段で自然力や精霊に働きかけようとする努力からうまれた。したがって、それらは「楽音」¹⁶⁾ とはほどとなく、気味わるい、ぞっとするような音響に関係がある。分類の4大部門のうち、体鳴楽器と気鳴楽器とが、はじめにあらわれる。

体鳴楽器は、自分の体をリズムカルに打つことから出発して、「打ち棒」「ガラガラ」「こする物」「踏み鳴らし穴」などがあり、気鳴楽器には「指孔のない笛」「うなり木」「ほら貝」などがある。

新石器時代へ移ると、楽器の種類も多くなり、体鳴楽器では「割れ目太鼓」「木琴」「果実の殻の鐘」など、気鳴楽器では「指孔のある笛」「横トランペット」「鼻笛」などが加わる。さらに、膜鳴楽器としてはじめて、「太鼓とバチ」があらわれ、また、弦鳴楽器では「楽弓」があらわれて、わずかながら旋律的衝動をみることができる。

ま と め

原始時代の舞踊と音楽とを、その起源の推測や未開民族の様式などから考察してみた結果、次のような関連性があることがわかる。

- (1) 発生的要素を身体的条件と機能に求めることができる。(人体の律動的要素)
- (2) 他の諸文化とともに生活に直結した実利的必然性によるものであり、そこに共通の要因をみることができる。
- (3) 不気味な、衝動的モチーフによる、単純なパターンの反復を主とした構造である。
- (4) 多くは宗教的であり、祭儀における祈りの様式によるもので、部族の全員がこれに参加した。(原始共産性)

- 14) 1. 体鳴楽器・idiophonic instrument 膜や弦のような張力なしに、みずからの弾性により振動する楽器。打つ、振る、はじく、こするの4種に分類される。
2. 気鳴楽器・aerophonic instrument 空気を発音体とする楽器。自由気鳴楽器、管楽器の2種に分類される。
3. 膜鳴楽器・membranophonic instrument 周辺を固定した膜の振動を発音体とする楽器。主として drum で、tubular d. (管状), kettled d. (釜状), frame d. (杖状) の3種に分類される。
4. 弦鳴楽器・chordphonic instrument 張られた弦の振動を発音体とする楽器。チター属、リュート属、リラ属、ハープ属の4種に分類される。(一般的分類と異っている)
- 15) noise. 聞く主体にとって不必要、障害になる音で、その価値は主観的なものである。
- 16) musical tone. 音楽作品を構成する素材としての音。本来、打楽器類は楽音ではなく、噪音または非楽音といわれたが、20世紀にいたって、電子音楽、ミュージックコンクレートなどの導入で、楽音・非楽音という分類は、きわめてあいまいで、かつ無意味なものとなりつつある。

このように、原始時代の舞踊と音楽とは、いずれも生活に直結したものであり、今日の概念からは、およそ舞踊とも、音楽ともいえない程のものでしかなかったことがわかる。

また、原始時代においては、舞踊と音楽を分離して考えることは不可能に近く、舞踊は音楽を助け、音楽は舞踊を助けて密接な関係を保ちながら発達したのである。

獲物を追うにつけ、神に祈るにつけ、異性を求めるにつけて、気味わるい身振りと叫声と騒音とが、繁みのあちこちに響き、こだましたことであろう。

以上で今回の研究発表を終るが、ページ数の制限のため写真や譜例を載せることができなかった。また、説明不十分な部分もあることと思われるが、いずれも参考文献により補っていただきたい。なお今後も継続した研究を行う計画であり、先輩諸氏の厳しいご批評と温かいご持導をいただければ幸いである。

参 考 文 献

- 舞踊史(小林信次著) 逍遙書院。
舞踊の文化史(邦匠美著) 岩波書店。
楽器の歴史・上(C. ザックスー柿木吾郎訳) 全音楽譜出版社。
比較音楽学 C. ザックスー野村良雄, 岸辺成雄訳) 全音楽譜出版社。
音楽文化史・I(野村良雄著) 全音楽譜出版社。
音楽の文化史(橘 西路著) 角川書店。
西洋音楽史・I(H. メルスマンー野村良雄, 原田義人訳) みすず書房。
音楽史・上(K. H. ウェルナーー星野 弘訳) 全音楽譜出版社。
音楽史(A. アインシュタインー大宮真琴, 寺西春雄, 平島正郎, 皆川達夫) ダヴィッド社。
ギリシャ神話・上(呉 茂一) 新潮社。
日本書紀・上(日本古典文学大系) 岩波書店。
Modern Dance Forms—Horst and Russell.
The Rise of Music in the Ancient World, East and West—Curt Sacks.
その他、音楽辞典、百科事典等。